

## マケドニアにおける伝統的住居についての研究（梗概）

白濱 謙一

## 第1章 はじめに

## 1-1 研究の背景

過去約10年の研究室の研究はギリシアを中心に民家（住居）の実測調査及び類型とその分布の研究を続けており、ギリシア本土北部に、地中海型の民家とも北ヨーロッパの木造民家とも異なる特異な型の民家の存在を確認している。

周知のごとくエーゲ海その他の諸島をはじめ地中海沿岸の民家はすべてが組石造であり、かつ部屋の構成は戸外に生活の重心を持つ地中海型である。中庭が居間として機能するために、屋内に居間に類する多用途の大きな空間を持っていない。

しかし、この特異な型の民家は組石造+木造の混構造で、部屋の構成は次の2つの型

〔ハヤティ〕と称するホールのような大きな空間を屋外屋根下を持つ型（仮称コザニ型）

〔ドクサト〕と称するホールのような大きな空間を屋内に持つ型（仮称マケドニア型）

を持つ民家で、北上するとともにその存在の密度が増す。この2つの型は共存しながらも、ギリシア領内では、前者の型はコザニを中心とする内陸、ハルキディキ、トラキヤ、そして後者の型は更に北のカストリアを中心とするマケドニア地方の山岳部に顕著である。その後の視察によってこの特異な型の民家の分布する地域は、ギリシア、トルコ、ルーマニア、ブルガリア、ユーゴスラビア、アルバニアなどと国境を越えて帯状にまたがっており、それぞれの国で伝統的民家として研究されている。しかしそれらの諸国が、周知のごとく先ごろまで極めて複雑な国際関係をもっていたために、相互に立ち入る研究は困難であった。したがってこの特異な型の民家についての地域全域をカバーする研究は希薄であり、数も少ない。

研究室では、常に住文化における異文化の移入とその変容について関心をもっており、その観点から、民族・言語・宗教が錯綜する上記の地域に、そして国境をまたいで存在する特異な型の民家に興味をもった。我々はこれらの地域全域にわたる住居の類型及びその分布を探り、かつ地域による差異をとらえて考察したいと考えている。

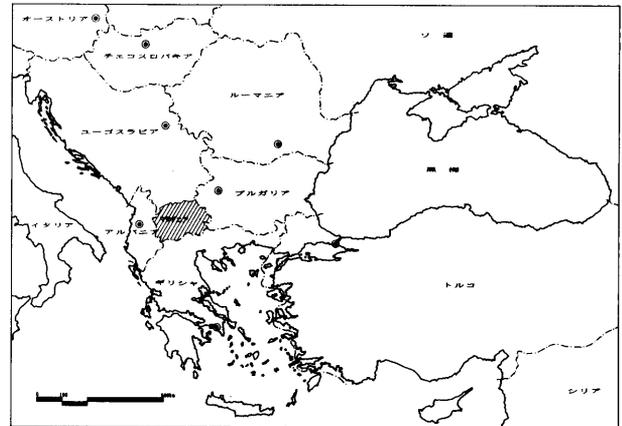


図1 ユーゴスラビア領マケドニア共和国の位置

本研究はその一環として、北部ギリシアに接するユーゴスラビア領マケドニアの伝統的住居について、その類型と分布、そしてその特性を明らかにし、更にギリシア及びトルコの民家との差異を探り、住文化の交流または移入の様相及びその推移、あるいはその後の西欧化による変容を明らかにしようとするものである。

## 調査時期

予備調査：1988年10月

本調査：1989年8月～9月

## 調査集落

SKOPJE, TITOV VELES, TETOVO, DEBAR, STRUGA, KRUSEVO, STIP, OHRID, STRUMICA, KOCANI, KRATOVO LUSOK, BITRA, PRESPA その他

## 1-2 資料について

スコピエ中心の大地震（1963）の際、民家は壊滅的被害を受けた。マケドニア共和国は復興と並行してこの伝統の保存のために、スコピエ大学を中心に民家の実測調査を行った。調査は緻密かつ膨大な数に及び、その一部は報告書の小冊子として刊行されているが、ほとんどは地方の市町村に未整理のまま保管されている。

我々はその資料の使用の許可を得ていたが、資料は原図のために取扱が困難で、しかもコピー機械が皆無のために、入手できたのは数軒分の図面の手持ち写真によるコピーだけであった。やむなく既刊の小冊子や著書からの図面を中心に資料とした。

## 第2章 ユーゴ領マケドニア共和国の伝統的住居

### 2-1 マケドニア共和国と文化

南北に長いユーゴスラビアの最も南に位置するマケドニア共和国はブルガリア・アルバニア・ギリシアと国境を接している。人口30万人程のスコピエ市はその首都である。6世紀ごろ、南下してきたスラブ人の1種族が定住したもので、後にその地名からマケドニア人と呼ばれるようになった。キリスト教（ギリシア正教）を受け入れ、古くはビザンチン帝国の支配下にあった。そしてその後19世紀まで500年の永い間オスマン・トルコの占領するところとなった。

オスマン・トルコはイスラム化を強制しなかったので厳しい経済的搾取と政治的圧迫のもとでもマケドニア人はキリスト教徒として辛うじて独自の言語・文化を護り続けた。オスマン・トルコがイスラム化を強制しなかったとはいえ、500年にわたる占領でトルコ文化の影響は大きい。どこの集落にもモスクやミナレを見掛け、トルコ風のチャルシャ（商工街）がある。食器や衣類や家具などにはトルコ語から借用した語彙が多い。街で聞く民謡風の音楽も不協和音を巧みに使い、複雑な拍子を小節をつけて唄う。西欧の音とは違った趣が濃厚である。

### 2-2 マケドニア共和国の伝統的住居

住居もそれにもれず、多分に影響を受けているものと思われる。したがってユーゴスラビア北部の民家と際立った差異が認められる。

北部の民家は、地下室はなく平屋か2階建てで入口に狭い玄関ポーチを持ち、2階建ての場合は“divhana”と呼ばれるベランダが取り付けられるものが多い。農村には木造平屋建もあるが市街地は石または煉瓦積みである。混構造は少ない。開口部は小さい。

南部では、石積みの下階の上に、開口部の大きい木造の上階が載る混構造の民家が多く見掛けられるようになる。もう1つの特徴は“chardak”（チャルダック）と呼ぶ広間が上階の主要な一隅を占めていることである。

この型の民家はほぼマケドニア全域に見られ、マケドニア以北ではその存在の密度が急速に減少する。また南下するに従ってその密度が増し、国境を越えてギリシア・ブルガリア・アルバニアに展開している。

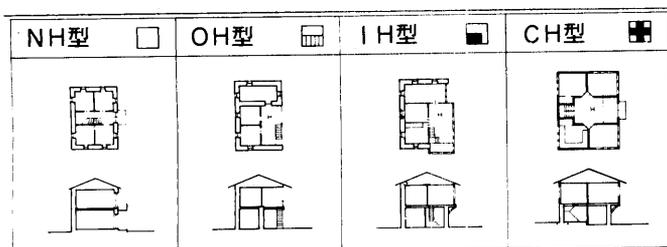


図2 マケドニア住居の4つの型

### 2-3 類型について

図2 参照

マケドニアの伝統的住居に次の4つの型が認められる

- ホール無し NH型 (no hall type)
- 外部ホール OH型 (outer hall type)
- 内部ホール IH型 (inner hall type)
- 中央ホール CH型 (center hall type)

〈注〉・マケドニアで“chardak”（チャルダック）と呼ぶ空間は、ギリシアやトルコで呼称が違い、また地域によってはそれらの呼称が混用されているので、これらの空間をひとまず英語の“hall”と称して扱う。

#### NH型 (no hall type)

ホールを全く持たない型である。マケドニアではその数は少ない。図2のNH型は多くの型の中の1例で、ギリシア北西部やアルバニアには多く見られる。廊下程度の通路があるがホールらしきものが無い。

#### OH型 (outer hall type)

組石造2階建。勾配屋根に覆われているが外部に開放された“chardak”（ホール）が特徴で、これが階段とともにファサードを構成している。上階平面は、正面にあるホールに面して幾つかの部屋がある。下階もほぼ同じ平面形で部屋は倉庫、ワイン倉庫、家畜小屋等に使われる。ホール及び階段回りは木造である。

#### IH型 (inner hall type)

下階の組石造の上に木造の上階が載った2階建以上である。階段を含んだ“chardak”（ホール）は完全な屋内で、大きな開口部を持った木軸の外壁で覆われている。ホール以外の部屋も開口部が大きく明るい。屋外にバルコニーが付いているものもあるが、ホールとしての性格は無い。

#### CH型 (center hall type)

屋内ホール型の1種で、規模も大きい。ホールは屋内の中央に位置し、部屋の配置が対称的である。階段はホールの一隅に階段室として配置されることが多い。

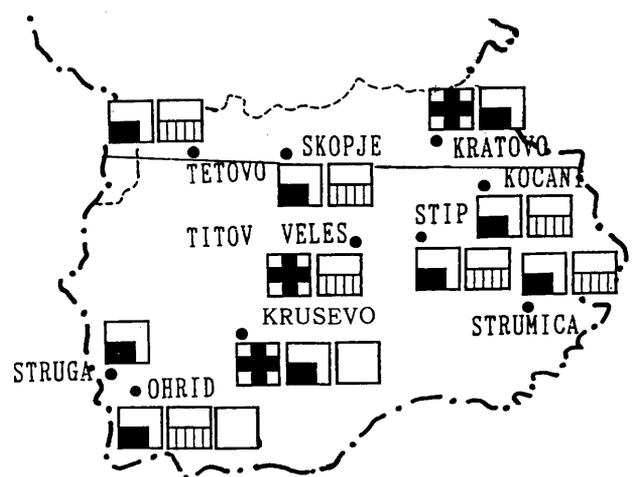


図3 マケドニアにおける住居類型の分布

## 2-4 分布について

図3 参照

分布図はマケドニアに4つの型のいずれが存在するかを示したものである。資料の採取自体が数量的統計を意図したものではないので、存在頻度を示すことはできないが、しかしNH型は文献にもその数は少なく、また視察によってもKRUSEVOに1軒を確認したのみでOHRIDでは確認できず、したがってその数は極めて少ないと判断できる。ちなみに、マケドニア以北やギリシア本土北西部にはこの型が多く、またホールを持たないという意味ではギリシア南部の民家はすべてこの型と考えてもよい。

CH型も資料では比較的大きな都市であるKRATOVO, TITOV VELES, KRUSEVOに見られるものの、その数は視察による確認と合わせても極めて少ない。しかもCH型はIH型の1種とみて差し支えない。

したがってマケドニアにおいては、OH型とIH型が主流とみられる。

視察の際の印象ではこの2つの型はマケドニア全土に共存していると思われる。そしてこの2つの型は極めて対照的な性格をもっている。OH型は明らかに生産活動と気候風土に適応した型であり、いわば生活の必要条件を満たす型である。一方、IH型(CH型を含む)は規模も大で、大きな窓や室内装飾からも接客・社交などの場を重視する傾向がうかがえ、いわば充分条件を満たす、ゆとりのある型と言ってよい。

## 2-5 平面形の地域差について

図4はOH型とIH型について、規模と形が地方でどのように異なるかを知るために、図面の揃った資料だけ使用して作成したものである。

(図3と多少の齟齬があるのは図3には不備な図面の資料も含めているためである。)

この図から幾つかの傾向が読み取れる。

1. この図も統計的に厳密な資料ではないが、多少の傾向はうかがえる。例えば、スコピエを中心とする平野部にOH型が多く、それより南部は山岳地となり、IH型が多い。この傾向はギリシア領マケドニアにもある。緯度とは直接関係は無く、むしろ気温・湿度と関係していると思われる。また農業以外で生計を立てている地域にIH型が多いと観察できた。

2. OH型は整形が多く、IH型は不整形が多い。これはトルコとは逆の傾向である。山岳地の斜面に沿って築く石造部の不整形が強く、上階の木造部で補正することができないためであろうか。

3. 規模もOH型よりIH型の方が不揃いである。OH型が、生活の必要条件を満たす型と考えれば、1家族に必要な規模としてばらつきが少なくなるのは頷けることである。

	OH	IH
OHRID		
TETOVO		
SKOPJE		
TITOV - VELES		
KRUSEVO		
STRUGA		
STRUMICA		
STIP		
KOCANI		

図4 平面形の地域差 (OH型・IH型)

### 第3章 マケドニア伝統的住居の特性について

2つの型についてそれぞれの特性を示す。

#### 3-1 OH型の構成と諸要素

##### 3-1-1 敷地形状

比較的農村落に多い。したがって敷地は広く、その周囲はルーズな囲いが廻らされる。囲いはときには日本の垣根のように樹木などの小枝で作る柵であったり、土や石で積んだ塀（それでも高さ1.5m程）とそれなりに高い門の付いたものも見掛けるが、道路の反対側は果樹園などになった広い敷地で、やはり囲いはルーズなものである。

##### 3-1-2 平面構成

図5参照

敷地の広い農村落では図示のように整形な平面形が多く、山岳地の斜面や市街化された所には不整形が多い。地上階（1階）は穀物やワインや薪などの倉庫、家畜の小屋として使う。また“chardak”の下の“trem”と呼ばれる空間とともに作業場等に使われたり、稀に食料倉庫に炉があって「冬のキッチン」に使われることもある。一般的には家族の生活はすべて上階（2階）と庭で行われる。上階の平面構成は“chardak”とその周りに2~3室の“odaja”と、ときには“kyjna”からなる。

##### “chardak”

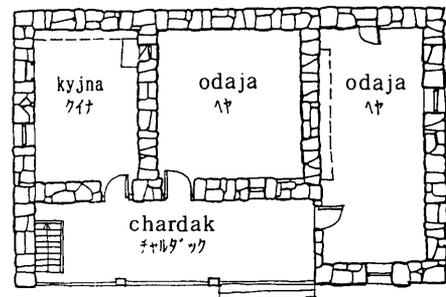
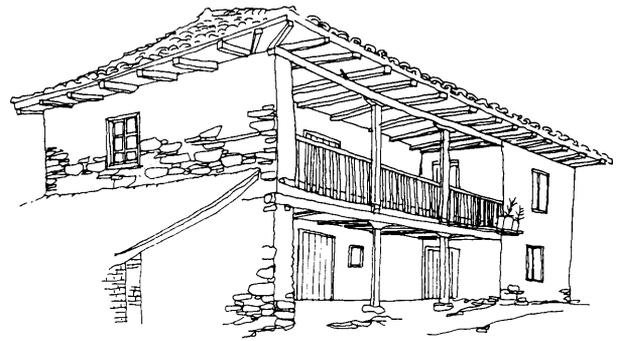
寒い冬を除いて家族生活は、この屋根下の戸外に面した“chardak”回りで行われる。ここは日当たりよく、見晴らしのよい昼間の居間であり、収穫用農作業・家事・育児・団欒・接客の場であり、すべての部屋を結びつける通路でもある。また結婚式等のキリスト教の行事を行う広間である。“chardak”の一部には床が一段と高くなっている“minsofa”と呼ばれる空間を持つものもある。ここは厚手の敷物を敷いて応接に使い、また寝そべるくつろぎの空間で、夏の寝室にすることもある。天井は張られず、小屋組があらわになっていて風通しがよい。文字通り風通しのよいコミュニケーションの場である。だから“chardak”は丁度日本の〔縁・縁側〕を広くしたような空間と言える。

##### “odaja”

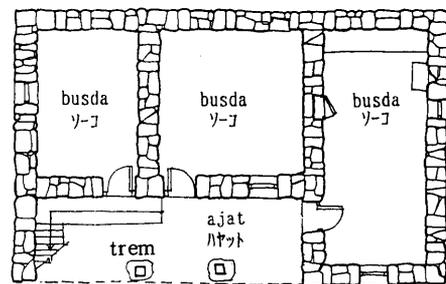
図6 a, b, c, d参照

“odaja”と“kyjna”はほとんど同じ設えの「部屋」で短辺が4.5~6.5 AR（アルシン）の方角または矩形である。炉のある「部屋」は、そこで炊事ができ、冬はねる、つくる、たべる、いる、くつろぐ、あそぶ等すべての行為が行われるので、それが最小の住居のような部屋である。

〈注〉ARアルシンは寸法単位で、1 ARは地方によって異なり、60~76cmである。



2階平面図



1階平面図

図5 OH型平面と姿図

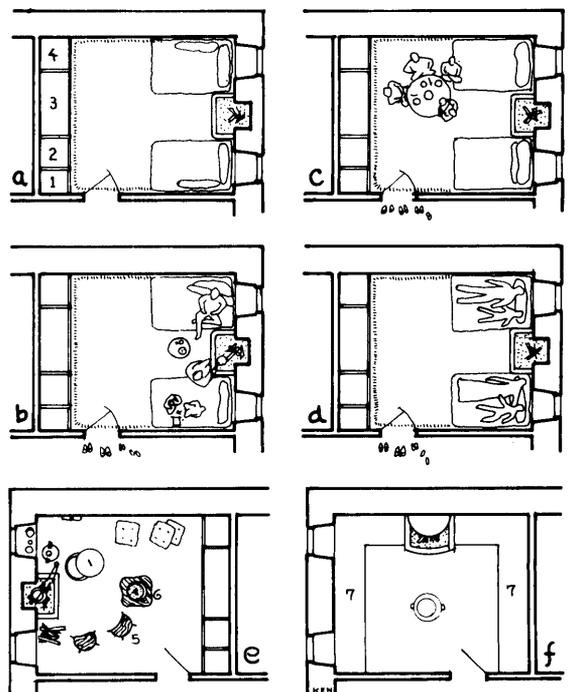


図6 “odaja”の使い方

“kyjna”

図6 e 参照

語源は英語の kitchen, ギリシア語の kouzina 等と同じであるが、厨房の意味より広く日本の「囲炉裏端」のように、つくる、たべる、くつろぐ、あそぶ等の行為が行われ、冬は温められているので子供などが寝ることもある。つまり茶の間と台所を一緒にしたような部屋を言う。これは炉のある“odaja”とあまり変わらないが他の部屋よりも炊事の機能が幾分充実し、戸棚は衣類や寝具よりむしろ食料の収納に充てられる。だから冬の居間である。夏は戸外で炊事と食事をするので他の部屋と同じく寝室に使われることもある。炉は日本の「囲炉裏」のようなもので暖房と炊事に使われる。炉の形式は囲炉裏にフードの付いたもの、壁付きの暖炉形式のもの等さまざまである。

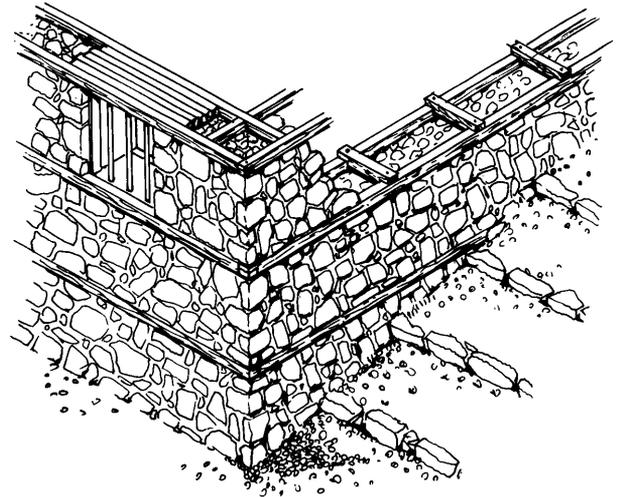


図7 壁の石積み (OH型・IH型共通)

### 3-1-3 生活様式

図6 fは接客専用に“mindel”と呼ぶ長い椅子<sup>いす</sup>を部屋の壁または窓に添って設けた使われ方を示す。

炉や、“mangaro”（火鉢）や食卓などの高さは30cm程で、室内では日本の座布団のようなものにあぐらをかいて座る床座形式であったようだ。小さな腰掛け（高さ30cm、直径25cmの木製の台のようなもの）のある場合は下足のままでもそこに腰を下ろしてあぐらをかいて座る。通常は家族は“odaja”や“kyjna”に入る所で脱いでいるが、隣人や客人は下足のまま招き入れるようである。

下足の着脱の場所が明確ではないのは、OH型が戸外の農作業を重視した機能本位の型であることを示している。

あるいはマケドニアでは、トルコのエディルネ付近のように入口で下足を脱ぐ生活に馴染んでいなかったためかもしれない。この仮説は意味もっているもので後で詳しく述べたい。

### 3-1-4 構造方式 図7, 図8 参照

壁は2階まで石積みである。石積みの補強に角材が2AR(約120~130cm)ごとに積み込まれている。窓や扉の上は木材のまぐさであり、あまり大きな開口部は望めない。

小屋組や“chardak”の床組は図8ではすべて角材で示したが、実際は丸太や、丸太に近い面に皮の付いた、しかも曲がった材が使われることも多く、特に大工の高度な技術無しで出来るように、極めて単純な構造になっている。

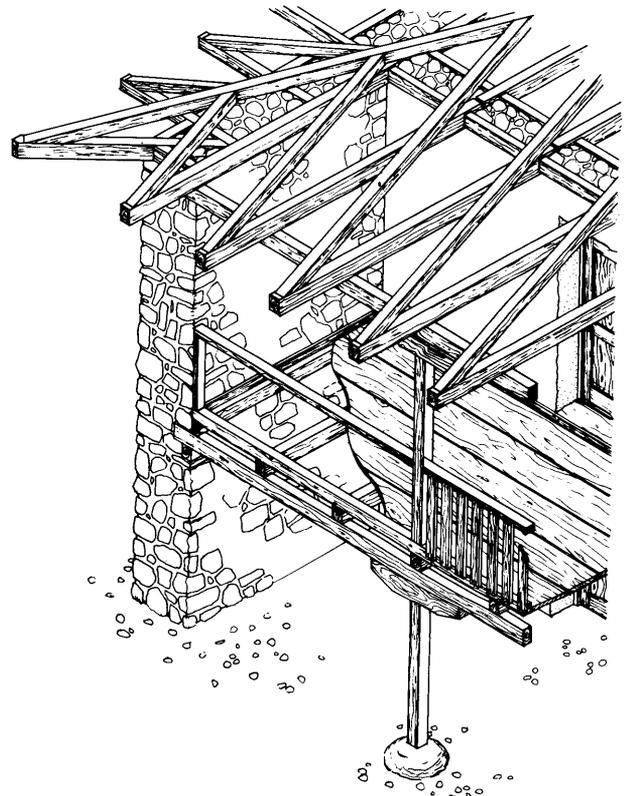


図8 OH型の軸組

### 3-2 IH型の構成と諸要素

#### 3-2-1 敷地形状

IH型は都市型で多くは庭を持ち、それを門・塀で囲っている。農地は持たないが果樹園のある広い敷地の家は道に面した側は高い石積みの塀(3 AR=180cm以上)を廻らし、しっかりした扉を持つ門を持っている。狭い敷地の場合は石積みの地上階(1階)に続いて3方を塀で囲む。農地または庭のある家は、主屋と離れて門の脇などに炉のある“petna kyjna”(夏のキッチン)を持っている。多くは便所・洗濯場とともに屋根を掛けて離れ屋となっている。夏に炊事の熱が家屋内に籠らないためと、戸外で食事をする習慣があるためである。

農地や庭のない市街地の家の場合でも、数軒共同の裏庭にこの夏のキッチンをつくる。

#### 3-2-2 平面構成

基本的には、石積みの下階の上に、木造(軸組造)の上階が載っている。中には下階に中2階を持ち、上階は2~3層の木造階を持つ規模の大きいものもある。

#### “trem” 及び “kepal”

厚く高く石積みされた下階は、傾斜地の場合は半分埋まって一部が地上階になり、平地の場合はすべてが地上階になっている。この石積みの下階それ自体を“trem”と呼ぶこともあるが、通常は道または中庭との出入口を入ると階段を持つホールがあり、それを“trem”と呼ぶ。地上階はこのほかに“kepal”(倉庫)があり、OH型の場合と同じく穀物、ワイン、薪等の保存と家畜小屋に使われる。

#### “zimcka coba-kyjna”(冬の間あるいは台所)

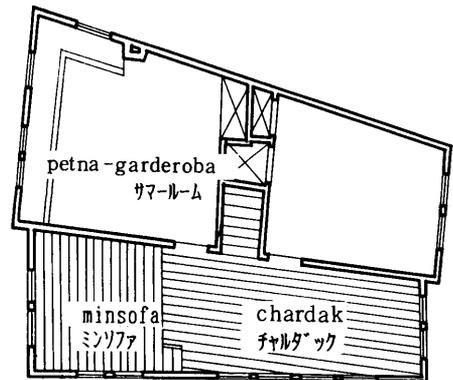
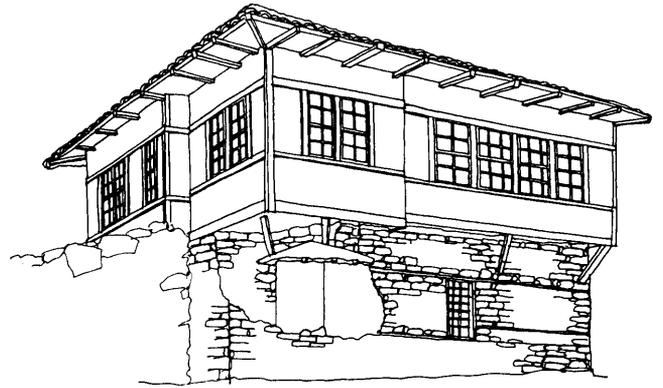
また中には石積みの下階に、2層の階(木造床の中2階)があり、しばしば“wpaje”(食料貯蔵室)の付随した「冬の間」(厨房と居間を兼ねた部屋で“kyjna”と呼ばれることもある)がある。ここには炉(かつては暖炉のようなフードの付いたものや囲炉裏のようなものであった)があり、冬の季節は多くの時間をここで過ごし、ここで寝ることもある。

図9参照

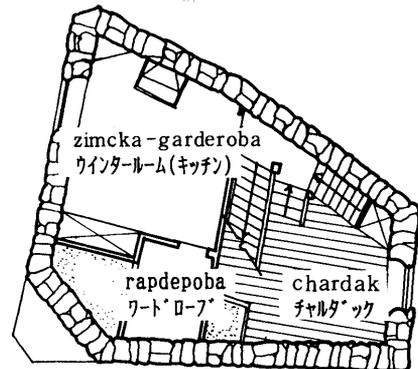
これらの部屋は、マンガロと食卓の高さが30cm程で、ときにはベッドのような造付けの長椅子もあるが、ほとんど椅子らしきものは使わず、床座式の生活であったことを示している。

#### “chardak”

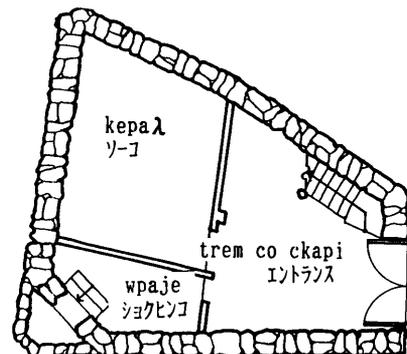
石積みの下階の上に、張り出して載る上階は木造軸組造であり、チャルダックも大きな開口部を持つ壁に囲まれた屋内型のチャルダックである。“chardak”はOH型と同じく板の間の多用途な空間であるが、OH型より生産の場としての機能が幾分薄れ、社交の場の機能が増した造りである。そのために天井が張られ、木彫や彩色の



2階平面図



中2階平面図



1階平面図

図9 IH型の平面と姿図

装飾が付いたり、窓際に“mindel”ミンデルと呼ばれる低い長椅子を持ったものが多い。規模は概してOH型のものより大きいものが多い。

“minsofa”（ミンソファ）

“chardak”の一部分の床を揚げ、手すり等で囲った部分を“minsofa”と呼び、厚手の敷物を敷きそこにあぐらをかいて座ったり、寝転んだりする場所である。ただしIH型ではこの空間が大きくなり、夏の間として使われるものもある。

“odaja” “odajce”（部屋） 図10参照

機能はほぼOH型の部屋と同じでチャルダックの周囲に配置される。OH型より規模が大きい。1辺が6～8ARの方形または矩形が標準的でそれ以上のものもある。そして造付けの収納家具や出入口の扉などに木彫や彩色の装飾がなされている。特に規模の大きな家では1部屋だけ部屋の2～3辺の壁沿いに低い“mindel”長椅子が造り付けられていて、暖炉や部屋の装飾は一層綿密に施され応接室としての機能を果たしている。

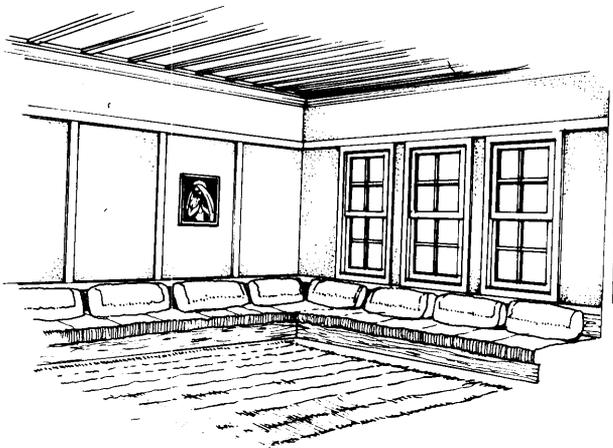


図10 “mindel”（長椅子）のある部屋

### 3-2-3 生活様式

下階の石造部分の入口を入ると階段があり、それを上ると“chardak”に出る。“chardak”はOH型と同じ多用途な空間であるが、大きな窓を持った壁で囲まれているためか西欧の“living room”的な色彩が濃くなる。

西欧風な家具が置かれている場合もあってここでは下足のままの生活であるが、“minsofa”は靴を脱いで上がり、座式の生活である。“odaja”（部屋）もOH型と同じような使い方（図6参照）ほぼ座式の生活であったようであるが下足を脱ぐ場所は曖昧である。たぶん下足のままと脱ぐ生活が混在していたものと思われる。

木造部分は窓も大きく、室内は実に明るく“kyjna”が夏用と冬用を区別して持っており、室内の生活がそれぞれの季節を快適に過ごすように配慮がなされている。

### 3-2-4 構造方式

図11参照

上階の主体構造は木造軸組造が多くを占めているが、2階建ぐらいで壁面の高さが低い場合は2面または3面を石積みで築いている。石積みが困難な持送り部分は当然木造軸組造である。持送りの出が大きい場合は、石積みの横木から方杖（ほうづえ）で支えている。

下階の石積みの構造はOH型と同じであるが、上階の荷重を支えるために壁厚が厚く、75cmもあるものが見られる。

木軸、小屋組とも角材が多く使われ、仕口もあまり複雑なものはない。軒の出は1～2AR（60～120cm）にも及ぶが、小屋組の陸梁（りくばう）を延ばして支えている。

壁の構造は内壁、外壁ともに柱に木ずりを打ち、その間に日乾し煉瓦（ひびせり）を詰めて表面を漆喰（しっくい）で固めたものである。木ずりの代わりに[葦]（あし）を編んだものを使ったり、詰めものに焼成煉瓦や石を使ったものもある。

壁の詰めものが重く、更に屋根は石や、焼成のスペイン瓦を用いて重いのに、筋違（すじか）いが少ない。そのために1963年の地震で傾いたり倒壊する被害が多かったのである。

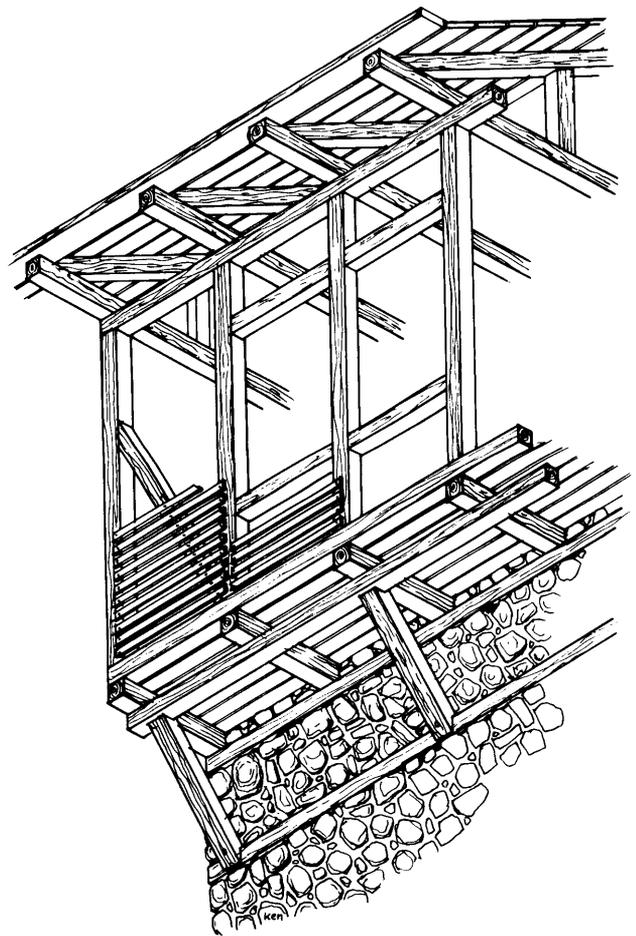


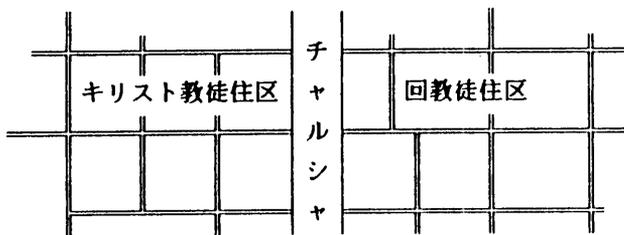
図11 IH型の構造方式

## 第4章 OH型・IH型住居の地域差比較

### 4-1 マケドニア人のみるマケドニアの伝統的住居

オスマン・トルコの占領下にあったマケドニアの街の構造は、回教徒住区とキリスト教徒住区が対置され、その中間に商業・宗教・政治・文化の中心であった“carsija”（チャルシヤ）つまり商工街があるのが特徴である。

チャルシヤとは役所、文化団体、宗教団体、手工業者、商店、倉庫、宿と馬小屋、浴場、カフェー、製パン業などがあり、必ず時計塔がある繁華街のことである。



「マケドニアの伝統」とはと問う場合に、マケドニアの学者たちはユーゴスラビア国内のマケドニア以外の5つの共和国と対比し、特に隣接するボスニア共和国との対比を強調し、そして更にもう1つ、マケドニアに定住していた回教徒との対比を忘れない。彼らは『マケドニア人とはキリスト教を信仰するスラブ人』と定義しており、伝統的な住居を語る場合も、前記の街の構造からも分かるように、マケドニアに存在する住居すべてではなく、キリスト教徒住区の住居に限る傾向がうかがわれる。MACEDONIAN HOUSEの著者 Prof. Dusan Grabrijanの意見を要約してみよう。起源はオリエントにあることを認めながら次のように語る。

**ボスニア共和国の住居**は、平屋建かせいぜい2階建である。マケドニアの住居に見る“trem”と呼ぶ半地下室のような入口の空間はない。代わりに入口には狭い玄関ポーチを持っている。また箱型の2階建には“divhana”と呼ぶ屋根の無いベランダがファサード一杯に付くことが多い。これは“chardak”の屋根のある空間とは全く性質が違う。

**回教徒住区の住居**はコートとガーデンを持った別荘風のものであった。DEVARでは丘の住居は路や谷や商工街や遠くの景色の眺望を保証するように高い壁の上に建てた。また谷の住居は迷路のような小道の奥に樹木を茂らせた庭の中央に建てた。路からは厚い石の壁で隔離されている。どちらの場合も防衛的な意味をもっている。TITOV VELESでは斜面にお互いの眺望を妨げないように時には家の上部が路に張り出して造られている。誰もが眺望の権利をもっていたのは、古いオリエントの、家庭の中に隔離された女性が可能な限りの眺望を持つべきとの考え方に由来するものである。以上のように回教徒の住居は各戸が閉鎖的で近隣の生活の場とつながっていない。

ない。だから逆に室内の生活に重点が置かれ装飾が施される。また家には男女の領域があり、接客は庭の門の近くにある“selamluk”と呼ばれる男の部屋で行われる。

**キリスト教徒住区の住居**はコンパクトな平面で高く聳える建て方であった。トルコ人から与えられた土地が限られていたためである。STRUGA, KRATOVO, OHRIDの街はその良い例で、3～4階建のものも見られる。それでも基本的には1核家族の住まいで、あまり門扉で囲わずに、数軒の家が1つの庭を囲んでグループを作ることさえある。家の主要な出入口は路に面しているものが多く堅固な扉がある。庭があっても高い石の壁で囲うことは無く、低い見通しの利く扉で、近隣とは互いに声を掛合える造りである。また、客を家族たちの仕事の場であった“chardak”で迎える習慣はいかにも開放的である。

### 4-2 ギリシア人のみるギリシア北部の住居 OH型

コザニ型はOH型である。この型は本来ギリシア本土に土着の形式で、古典古代のメガロン様式は入口ポーチを持っており、それが幾つか横に並んだ形が平屋建のOH型である。これが斜面に建つときはポーチ床は次第に高くなり、その下部が物の置き場になる。更に高くなったものが2階建のOH型である。

この型に塀を廻らし、塀沿いに納屋やパン焼き窯や炊事・洗濯場や家畜小屋が取り付け、屋根が掛かると典型的な中庭住居の形式になる。これは後にヨーロッパの住居建築の系譜となる、中庭に面してポルティコ(列柱廊)を持つ型の原型となったと考える。

### IH型

ギリシア領マケドニアのエディサヤカストリアやメツォボンに見るIH型はOH型とは異質であり、またOH型から発展したものではない。直接的には占領していたトルコ人がもたらした様式と認めるが、しかしこの様式はもともとビザンチンの技術をもつギリシア人職人集団(ギルド)が作り上げた文化である。その根拠は、この型がギリシア正教会と同系の木工技術を必要とする点にあり、また職人集団の基地がギリシア北部の村々に多いからである。

(Prof. N. Moutsopoulosの論文を意識)

### 4-3 トルコ人のみるトルコの伝統的住居

トルコ・オスマンの住居の特徴は

- 軽快な構造
- モジュールに従った窓割りなど
- 非対称な平面計画

であるが、これはオスマンがバルカンや中東地域に領土を拡張した時期に流入したさまざまな文化が溶け込んでいる。

## 生活空間

「ハレムリック」は家族の居間としての領域、「セラムルック」は街路と住居の間にある離れ屋で応接的な領域がある。小規模の場合は1部屋だけ「セラムルック」として確保している。

トルコの住居における部屋は、いる、たべる、ねる等さまざまな行為のために、部屋には戸棚・衣装たんす・サイドボードが造り付けられている。布団や枕は朝には畳んで仕舞われる。床に置かれた低い台の上に、真鍮の大盆を載せれば部屋は食事室に変わる。

家具らしきものは窓のある側の壁に設けられた低く幅広い「ディヴァーン」に沿った「セディーール」くらいのものである。家具を置かないので絨毯が重要な要素になっている。豊かな彩りが部屋に温かみを与える。

### “S O F A” (hall)について

CH型の起源も、またすべてのトルコの住居の起源もアジアにある。アジア地域の遊牧民が木切れをドーム状に作って皮や毛布で覆った「ユルト」の内部は放射状で、その求心的なデザインはモスクや神学校や宮殿などに用いられ、進展を遂げた。18世紀に最盛期を迎え、19世紀中葉には廃れてI H型(inner hall type)へと変わっていった？

OH型はトルコ住居の発展過程の第1段階である。

ホールの屋根を支える柱と柱の間にガラス板を入れるようになり、19世紀以降には普通の窓になった？

I H型は次に展開されるタイプ？ でトルコでは最も広く分布している。ホールが屋内にあると部屋への行き来が楽になるからである。その代わりに庭・自然とのつながりが失われる。この型は主として都市住居である。

### 突き出たアルコーブ

トルコ住居のもう1つの典型は上階が突き出ている形である。屋内からはアルコーブが道路の上まで出ていることになる。その大きな出を木製の方杖で支えているので特異な印象を与える。この手法の必要性について

- 座る場所を重視して高い位置を提供する。
- 1階の壁面線を越えて部屋を広くする。
- 庭の無い都市住居に街路などの公共スペースに対する眺望を確保する。
- 採光と通風の確保？
- 街路に影を与える？ (以上 by Ahmet Ertug)

### テント生活との関連

トルコ住居の個々の部屋は1つの住居としての機能を備えている。テントを最小限の住居ととらえると、人間の行動の幾つかは住居の外で行われているもので、幾つかのテントに囲まれた外部空間は、トルコ住居の幾つかの部屋に囲まれたホールに重ねてイメージされる。トル

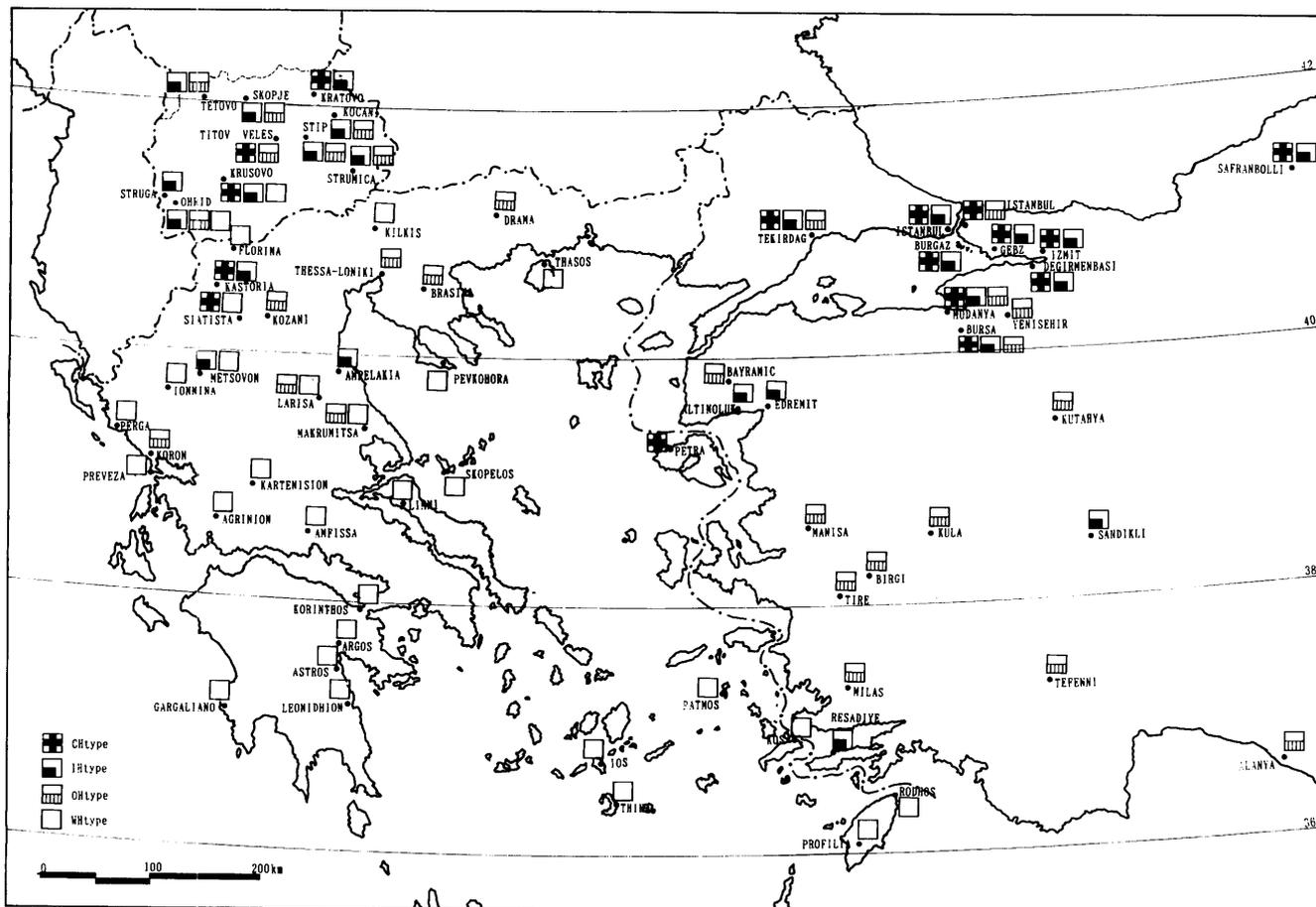


図12 石造+木造型住居類型の広域分布図

コ住居の基盤となる原則がテント生活から由来していることを示している。

**部屋の機能と構成の原理**

1. 生活のすべての機能に対応するフレキシビリティ
2. 家具、寝具、食器などすべて収納する
3. 1つの部屋が1家族（父母子供）の住まい
4. 部屋は共通エリア（ホール）の周りに配置される。

**平面形式の変遷** トルコ民家の平面形4つの型は

1. NH型(ホール無し型)
  2. OH型(外部ホール型)
  3. IH型(内部ホール型)
  4. CH型(中央ホール型)
- であるがこの順序が歴史の変遷を示すという説があるが事実がこれに疑いを与える。しかし、古い時代に普及した型から現代普及している型までの変遷順位とすれば問題はない。トルコにおける「型」の起源はテントである。この順位番号の0番にテントがくる。??

(“Turkish House” Eldem. S. H. 著より)

〈注〉文中の?マークは著者が疑問を懐いたサイン。

**4-4 広域地域差について**

ギリシアの伝統的住居の類型と分布についての我々の

研究成果と、Eldem S. H. 氏のトルコ住居に関する詳細な研究を参考にして同型の民家の広域分布図を作成した。(図12)

また、地域によるその特性の違いを表として作成した。(表1)

予定していたブルガリアの資料がまだ入手できず、アルバニア・ルーマニアも観光的な知見のみで資料に欠けるので、ここではこれ以上の考察は避け、後日、本論文でこれを充足する所存である。

**第5章 おわりに——平面形式の変遷について——**

トルコ住居について、Ahmet Ertug 氏や Eldem S. H. 氏は平面形式の変遷について触れており、

NH型⇒OH型⇒IH型⇒CH型あるいは

テント⇒OH型⇒CH型⇒IH型という図式を説くが、共に充実した研究論文にもかかわらずこの部分だけは飛躍が多く、かつ互いに矛盾もあって、にわかに頷き難い。

IH型はオスマン・トルコ全盛期の中心地、イスタン

**表1 石造+木造型住居の地域別特性表**

	ユーゴ領マケドニア	ギリシア（本土北部）	トルコ（西部）
型と分布	NH無し北部OH>IH.南部OH<IH	NH・OH・IH 共存	北IH(CH)のみ, 南NH&OH>IH
立地傾向	平地緩斜面・村・散在 緩急斜面・街・集住	平地緩斜面・村街・集住 緩急斜面・街・集住	平地緩斜面・村街・散在 平地緩斜面・村街・集住
敷地門扉	OH IH 領域曖昧, 門無扉低 領域やや曖昧, 門弱扉低, 入口扉強	OH IH 農村領域曖昧, 都市門強扉高 門弱扉高, 入口扉強	OH IH 領域曖昧 門弱扉低
平面構成	OH IH hall, (minsofa), 部屋, (kyjna) hall, (minsofa), 部屋, (kyjna) 1家族向き	OH IH hall, 部屋, kouzina hall, kiosk, 夏の間, 冬の間 2世代家族向け	OH IH hall, 部屋 hall, kiosk, 夏の間, 冬の間 多世代向き, 男の間, 女の間
平面形	OH IH 整形>不整形 整形<不整形	OH IH 整形=不整形 整形=不整形	OH IH 整形<不整形 整形>不整形
断面形	OH IH 2階 2, 2.5, 3, 3.5階建	OH IH 1~2階 2, 3, 4階	OH IH 1~2階 2~3階
HALL	OH IH 接客を含めすべての生活の場 接客室あり, その他の生活の場	OH IH 接客を含めすべての生活の場 接客をkiosk, その他の生活の場	OH IH 接客を含めすべての生活の場 各室充実し, 通路機能増大
MINISOFA or KIOSK	OH IH minsofaを持つものは少ない minsofaを持つが存在感小	OH IH kioskを持つものは無い kioskを必ず持ち存在感大	OH IH kioskを持ち存在感大 接客室充実しkiosk縮小
室内装飾	OH IH 無し 天井無しまたは板 有るが控え目 天井竿縁・格子 太陽放射模様・円形多用	OH IH 接客室のみ有り 天井板張り 有り(kiosk中心) 天井綾格子 植物文様多用・八角形多用	OH IH 彩色, 彫刻有り(kiosk中心) 各室彩色, 彫刻多用 イスラム文様五角星六角形多用
開口(窓)	OH IH 石造部で小, 少 木造部分大, 多	OH IH 石造部で小, 少 木造部分大, 多 kiosk部特多	OH IH 中, 並 木造部分大, 多
造付け長椅子	OH IH ほとんど無し 高30幅120 壁沿I形, L形	OH IH 高50幅50長壁沿収納兼用 wL形 高50幅50長壁沿 wL形, U形	OH IH 高30幅90長壁沿 wL形 高30幅90長壁沿 wL形, U形

注: <>記号は存在密度の大小を表す。綾格子とは45度回した格子形  
高30は高さ30cmを表す。wL型はL型が暖炉の両側にある形

ブルやエディルネを囲む地域と、バルカン半島のルメリ地域（トルコの占領地）に分布しており、本国が回教徒の習慣で大家族であるのに反して、ルメリ地域では、キリスト教の1家族単位の風習が存続し、規模が小型化し形式が略化されている。そのために、ギリシアではキオスクが、マケドニアではチャルダックが中心的な扱いになっているなど、地域的な特性が加味されている。

I H型の分布域にNH型が極めて少ないのは、NH型の石造の上に木造文化のI H型を載せたためかもしれない。

OH型の分布域はI H型より広く分布し、その地域はほぼ年間降雨量が800mm前後の地域に一致する。さきに述べたように、OH型は文化や経済の中心からやや離れた地域に多く存在し、必要条件を満たす型であること、また、OH型の分布域がNH型の分布域とオーバーラップしながらごく自然に移行していることなどから、ギリシアの教授の主張するように、OH型は降雨量などの気候風土に影響されて、石造のNH型に屋根のある外部空間つまりOuter hallが付け加わったと考える方が妥当であり、またI H型が伝播する以前から、恐らくビザンチン時代から存続しているものである。

以上の我々の現在までの知見から、独断的に仮説を述べると、OH型とI H型はそれぞれ独自の変遷を経て近年まで併存していたもので、OH型⇒I H型の図式の変遷の過程ではない。

#### 〈謝辞〉

研究に当たり、スコピエ大学の建築学科の協力を得ることができた。教示をいただいたGeorgi Konstantinovski教授、Vladimir Boskovski教授、自著を含めて多くの資料を提供していただいたJasmina Hadzibva Alik-sievska教授、及び現地を案内してくれた大学院学生に感謝の意を表します。

#### 〈参考文献〉

(1) マケドニア住居に関する文献

СТАРА ГРАДСКА АРХИТЕКТУРА ВО ОХРИД  
ВТОРО ДОНОШЕТО ИЗДАНИЕ  
БОРИС ЧИПЛИЦ  
МАКЕДОНСКА КНИЖА  
СКОПЈЕ, 1982

を含め24冊

(2) トルコ住居に関する文献

- Turkish Houses of Ottoman Period by Sedad Hakki Eldem
- Turkish House in search of Spatial Identity by prof. Onder Kucukerman

を含め10冊

(3) ギリシア住居に関する文献

- 白濱研究室の継続研究『ギリシアの伝統的住居』に関する一連の論文及び著書。
- The Popular Architectur of Verria by Prof. N. C. Moutsopoulos

を含め15冊

#### 〈研究組織〉

- 主査 白濱 謙一（神奈川大学 教授）  
委員 菅原 義則（神奈川大学大学院2年生=当時）  
土田 久幸（同 上 学部4年生=当時）  
川崎 圭子（同 上 学部3年生=当時）  
通訳 大場千恵子（津田塾大学大学院2年生）  
（現在スコピエ大学に留学中）